

平成21年6月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520179
 研究課題名（和文） 古活字版成立に関する総合的研究
 — 仁和寺所蔵古活字を中心にして —
 研究課題名（英文） A Comprehensive Study of the Making of Old Movable Types (ko-katsuji),
 Preserved in Ninna-ji Temple (Kyoto, Japan) and Other Loci.
 研究代表者
 村上 明子（MURAKAMI AKIKO）
 関西外国語大学・国際言語学部・教授
 研究者番号：70261112

研究成果の概要：

仁和寺所蔵古活字の種類と総数、特質について報告し、心蓮院版「倭玉篇」の2種3版における使用状況を明白にした。また、活字の現状から心蓮院版が量産されなかったことを確認し、当時の貴族階級にとって学術・文芸が門外不出の貴重な文化資本であったように、古活字印刷も南蛮や中国・朝鮮イメージと象徴的に結びついた事で文化的権威となり、近世初期においては、テキストの複製よりは権威の象徴としての価値や意義が享受されたのではないかと推論した。

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：日本近世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：仁和寺所蔵古活字・心蓮院版倭玉篇・慶長古活字・古活字版印刷・勅版・寺院出版・東アジアのメディア・近世東アジア史

1. 研究開始当初の背景

(1)仁和寺所蔵古活字は、平成元年に約2300個の存在が報告され、確認作業を行った結果、その一部が舟橋秀賢の『慶長日件録』にある、いわゆる心蓮院版「倭玉篇」（慶長9年刊）に使用された活字であることが判明した。しかし、当該古活字が「倭玉篇」諸版にどのように使用されたかについての精査は行われていなかった。

(2)仁和寺には心蓮院版「倭玉篇」使用活字とは大きさの異なる本文活字が所蔵されている。この活字の使用書籍は特定されないものの、心蓮院に「倭玉篇」以外の書籍を印行する印刷工房が存在したことは裏付けられた。しかし、仁和寺が所蔵する古活字本の存在はあまり知

られておらず、心蓮院での古活字印刷との関連性も考慮されてはいなかった。

(3)仁和寺には、慶長勅版で知られる後陽成天皇の第一子良仁親王が、法親王として慶長6年に入寺しているが、心蓮院版「倭玉篇」の印行はその3年後であり、心蓮院版の印行が後陽成天皇の開版事業の影響下に成立したとの推測が可能である。これは逆に言えば、仁和寺所蔵古活字の形態や心蓮院版の印刷技法と、慶長勅版の使用活字や印刷技法との間に共通性があるということである。仁和寺所蔵古活字や心蓮院版から慶長勅版を捉えるという視点は、本研究開始時にはなかったものである。

(4)古活字印刷は、キリシタン版と朝鮮活字版の二つの印刷技法の影響下に成立したと考えられているが、研究開始当初は16～17世紀の

日中朝の、およびイエズス会の出版活動に関する総合的な参考文献目録がなく、比較研究の基盤に欠けていた。

(5) 古活字版開版のための発案者・依頼者である天皇家・徳川家・豊臣家は、当時政体形成の可能な最有力者であり、諸寺院や角倉家はその周辺にあった。16世紀末から17世紀にかけては東アジア社会全体の政情が安定しておらず、国内では政権奪取や維持のために南蛮や中国・朝鮮の海外勢力を取り込む試みがなされていた。それは武力や戦闘技術に限らず、活字印刷のような最新の文化や複製技術もまた「権威の象徴」として権力者の政体形成に利用されたと推測される。古活字印刷の発生と衰退を印刷業の経済的発展の中に捉える研究はあっても、上記のような、国際情勢や国内政治の象徴文化的な権威・権力関係において把握しようとする視点は研究開始当初には見られなかったものである。

2. 研究の目的

本研究は、仁和寺所蔵古活字の調査研究を基に、古活字版成立の総合的解明をめざすものであり、具体的に以下の目的を有する。

- (1) 仁和寺所蔵古活字の使用状況を古活字版『倭玉篇』諸本により確定する。
- (2) 仁和寺所蔵古活字の調査研究を基にして、近接した時期に行われた慶長勅版の印刷技法との関連性を考究する。
- (3) 古活字版の成立を東西文明の技術的、文化的融合の観点から考察するために、日中朝の出版活動、およびイエズス会の出版活動に関する参考文献目録を作成する。
- (4) 活字印刷という文化事象を中心にして、当時の人々の古活字版に対する認識や古活字印刷の持つ象徴文化的意義を考察し、その意義を生じせしめた当時の社会状況を明確にする。

3. 研究の方法

- (1) 予備調査段階の平成18年、各々の専門研究者の協力により「仁和寺所蔵古活字研究会」を組織した。
- (2) 平成19年度～20年度にかけては古活字版研究のための基礎的な文献調査を行った。
 - ① 『倭玉編』の諸版ほか必要な古活字版の閲覧・複写・収集を行った。また、可能な限り写真・図版類を収集した。
 - ② 先行研究を網羅するために研究文献の収集を行った。
 - ③ 収集したデータを総合して研究文献目録を作成した。
- (3) 仁和寺心蓮院関係の資料を調査し、古活

字版刊行に関する記録の有無を確認するとともに、所蔵する古活字本を確認した。

(4) 仁和寺において次の作業を行った。調査中、資料保護上不適切な事態が予想されるような場合には、仁和寺、および教育委員会文化財保護課に相談した。

① 活字の分類と採寸、重量測定

② 活字全体と特色ある活字に関する調査の作成

③ デジタルカメラによる、収納状態での活字全体の写真、及び特色ある活字個々の写真の撮影

④ 必要とされる活字の乾拓

(5) 木製活字印材の使用樹種の特定（京都大学生存圏研究所による非破壊検査）

(6) 古活字に付着した物質の成分調査、および活字裏面・側面の墨書の読み取り調査（国立奈良文化財研究所による非破壊検査）

(7) デジタルカメラで撮影した古活字、ならびに乾拓資料、『倭玉編』諸版をデジタルデータ化した。

① 仁和寺所蔵古活字の内、漢字活字第1種、及び割注用漢字活字・訓註用片仮名活字等と『倭玉篇』影印本・国会図書館所蔵本・天理図書館所蔵本とを照合して使用活字を特定し、古活字と諸本の使用活字対照一覧表を作成した。

② 仁和寺所蔵古活字本を中心とした漢字活字第2種使用書籍の捜査は現在も継続中である。

(8) これらの調査研究の成果に基づきデータ分析を行い、報告書、および図版を作成した。

4. 研究成果

本研究において調査整理した仁和寺所蔵の活字資料は、そのほとんどが印刷に使用された木製活字であり、活字以外の、たとえば罫線材や摺刷盤、収納箱といった付属品は残存していない。その他の印刷用材としては、若干のインテルと、摺刷時に使用されたとと思われる墨片が残存しているのみである。

以下、これらの活字資料について説明する。

(1) 仁和寺所蔵活字の材料

仁和寺所蔵活字は、すべて木製活字である。京都大学生存圏研究所の調査により、これらの木製活字の材料が、遺存する日本の他の古活字と同じく桜材であることが判明している。ただし、インテルとして分類した木片の中に、一片のみ金属製の小片が混入しており、これについては現在、成分分析中である。

(2) 仁和寺所蔵活字の保存状態

仁和寺所蔵活字は、その存在が報告された時点で当初の収納状態を喪失しており、便宜上使用されていた木製および紙製の収納箱

にも損傷が見られたので、現在、桐製の仮収納箱を製作し、それを使用している。

本文用漢字活字には、虫損や部分的な破損の見られるものが含まれるが、保存状態は必ずしも悪くない。しかし、小型の数字活字や一部の訓註用片仮名活字には深刻な虫損や破損が認められる。

(3)活字の総数と種類

仁和寺所蔵のすべての活字を、以下の、現存する古活字本『倭玉篇』諸本と照合した。

- ①日本古典全集収録、影印本『倭玉篇』
- ②国会図書館所蔵本（五段本 WA7-13）
- ③国会図書館所蔵本（五段本下巻 WA7-66）
- ④天理図書館所蔵本（五段本中・下巻 813-イ 39）
- ⑤天理図書館所蔵本（四段本下巻 813-イ 25）
- ⑥天理図書館所蔵本（四段本下巻 813-イ 57）

この内、①・③・④が同版、⑤・⑥が同版であり、②はいずれとも異なっている。すなわち、心蓮院版『倭玉篇』は4段本・5段本の2種と3版がある。

この2種3版と照合の結果、仁和寺所蔵活字は、心蓮院版『倭玉篇』に使用されたことがほぼ確認できる活字と、使用された書籍が不詳である活字とに大別された。ただし、訓註用片仮名活字に関しては、版本に印字されている活字数が非常に多く、また同文字の活字が酷似するため、視覚による特定に困難を生ずるものがある。銀行印の印影照合などの技術を参考にしてさらなる精査の必要があると思われる。

さて、活字は寸法、形態、用途から、以下のようにさらに細かく分類できる。

1 心蓮院版『倭玉篇』に使用されたことが確認できる活字

- ①本文用漢字活字 第1種
- ②割注用漢字活字
- ③割注用二字活字
- ④訓註用片仮名活字
- ⑤柱題用漢字活字
- ⑥柱題用数字活字
- ⑦魚尾

2 使用された書籍が不詳である活字

- ⑧本文用漢字活字 第2種
- ⑨数字用活字
- ⑩二字活字
- ⑪陰刻
- ⑫近世木活
 - 漢字活字 第1種
 - 漢字活字 第2種
- ⑬不定型活字

上記の分類に従って活字の寸法・重量・個数を「表1 仁和寺活字分類表」として以下

に掲げる。寸法・重量の数値は、個数の多いものはサンプルの平均値である。

1 心蓮院版『倭玉篇』使用活字

コード	分類	寸法（縦×横×高さ）mm	重量（g）	個数（個）
101	本文用漢字活字 第1種	21,1×20,7×19,3	5,1	447
102	割注用漢字活字	8,7×10,3×19,0	0,9	4
103	割注用二字活字	12,9×10,3×18,8	1,4	2
104	訓註用片仮名活字	4,0×5,1×18,7	0,2	158
105	柱題用漢字活字 玉	14,6×20,3×19,0	3,4	1
	下	16,4×20,2×18,2	3,5	1
106	柱題用数字活字	10,5×25,2×18,9	2,8	14
107	魚尾	15,1×26,0×19,4	5,3	1

2 使用書籍不詳活字

コード	分類	寸法（縦×横×高さ）mm	重量（g）	個数（個）
208	本文用漢字活字 第2種	12,4×16,0×19,0	2,1	1556
209	数字活字	7,3×13,6×11,2	0,6	116
210	二字活字（陰刻一字を含む）	12,1×16,9×18,9	2,1	8

211	陰刻 子大 / 水	18, 3×21, 3 ×19, 3	5, 4	1
212 1	近世木 活漢字 第1種	19, 6×19, 9 ×19, 6	3, 7	2
212 2	近世木 活漢字 第2種	12, 0×12, 3 ×18, 9	1, 3	10
213	不定型 活字			8

表1 仁和寺活字分類表

活字の総数は、インテル(未彫刻活字材も含む)、破損活字を除いて、2329個である。活字には底面に彫字のある両面彫字活字も含まれている。また、ごくわずかではあるが側面にも彫字のある活字が存在する。これらの活字の特徴と個数を「表2 両面及び側面彫字活字分類表」として以下に掲げる。

分類	特徴	個数(個)
本文用漢字活字 第1種	天地同	79
本文用漢字活字 第1種	天地逆	57
本文用漢字活字 第1種	側面	2
本文用漢字活字 第2種	天地同	8
本文用漢字活字 第2種	天地逆	5
訓註用片仮名活字	天地同	5
訓註用片仮名活字	天地逆	1
柱題用数字活字	天地同	1
数字活字	天地同	1
陰刻	天地逆	1
二字活字 但篇/摧	天地同	1
二字活字 後下/略	天地逆	1

表2 両面及び側面彫字活字分類表

両面及び側面彫字活字は合計162個あり、先の活字に加えると、活字総数は2491字となる。なお、インテル・破損活字は57個、墨片は42ある。

(4)活字の概要

紙幅に制限があるため、重要と思われる活字を中心に概略を述べる。

①本文用漢字活字 第1種

直方体で、底面は、一部に削れや欠けの見られるものもあるが、すべて扁平である。駿河版銅活字や伏見版木活字第1種底面が有するV字の切り込み等は、仁和寺所蔵活字すべてにおいて全く存在しない。彫字方法は薬研彫りで、彫字面の面積の差異や書体などから複数の彫字工の存在が推測される。

底面・側面にも彫字した活字があり、一字だけではあるが、文字の部分的な欠落を修理した形跡の認められる活字も存在する。活字用材を非常に大事に使用していることがわかる。その他、底面に文字の彫りかけや墨書の見られる活字も確認された。

この種の活字は、ほぼ心蓮院版『倭玉篇』に使用されたことが確認できる。一致する活字数の最も多いのは、②国会図書館所蔵本(五段本WA7-13)である。また、版によって使用活字が相違し、同字活字に2種類あるような場合、たとえば「虜」字などは仁和寺に2種類の活字が揃って残存しており、活字の紛失や磨滅して使用に堪えなくなったために差し替えられたのではないことがわかる。

全体に墨付はさほど深くはなく、彫字面の磨滅もあまり認められない。墨汁による汚染度の低いものの多くは使用が確認できないが、たとえば「尼」字のように文字部分のみに墨付があり、それ以外の木地がそのまま見られるような活字にも印字の確認できるものがわずかながら存在する。これらの活字の状態からは、印刷部数が数十部どころか、きわめて少数だったとの推測が可能になる。

④訓註用片仮名活字

本文用漢字活字第1種に対応する片仮名活字で、見出し漢字の右傍に音として用いられると同時に、下部に附訓として使用される。

活字の高さは、第1種漢字活字とほぼ同じである。横寸法は第1種漢字活字の約4分1、縦寸法は約5分の1に該当する。直方体で底面は扁平、一部に両面彫字活字がある。

古活字本『倭玉篇』3版の差異は、多くはこの訓註用片仮名活字使用の差異によるものである。活字を中心に見るならば、第1種の見出し用漢字活字は同一であっても、訓註用片仮名活字の使用状態は3版すべてが相違している。それは単に、前の版の仮名遣いを改める、附訓を取捨するなどの部分的な相違ではなく、終始全く違う活字で組み直されている。これは組立式活版印刷であるから当然ではあるが、第1種活字の状態と併せて考

察する時、心蓮院版『倭玉篇』は一時に十数部が印刷されたのではなく、必要が生じた時に限られた部数のみ、時には完本ではなく下巻のみを、それも決して頻繁にはなく、わずかな機会にのみ印刷されたのではなかったかとの疑念が生ずる。

当時の古活字印刷に大変な労力が伴ったであろうことは想像に難くない。近代的合理性に基づいて考えるならば、複製技術である以上、多大な労力に見合うだけの、ある程度の部数が印刷されたと思いがちである。しかし、当時の貴族階級において学術・文芸が門外不出の貴重な文化資本であり、閲覧・書写に厳しい規制を設けていたことを思うならば、また公共圏が成立していなかった当時の状況下において、必要以上の印刷が行われたとは考えにくい。「倭玉篇」自体、慶長期以前に書写された伝本で現存するものは少なく、ましてや心蓮院版『倭玉篇』は、「龍龕手鑑」に基づき漢字の配列を改編した特殊な書籍である。甚大な労力を費やして作成したものが公にされないがゆえに価値を持つということは、「古今伝授」をはじめ、さまざまな事例がある。

⑧本文用漢字活字第2種

心蓮院版『倭玉篇』には使用されていない活字である。すべてが漢字活字だが、両面彫字活字の裏面に梵字と変体仮名の「わ」（「王」のくずし字）がそれぞれ1字ずつある。

高さは第1種漢字活字とほぼ同じである。しかし、縦・横寸法が異なっており、第1種活字よりも小型である。直方体で底面は扁平、一部に両面彫字活字があるが、第1種活字に比べ、その数が占める割合は甚だ少ない。彫りは第1種漢字活字よりも浅いが、字体は一樣ではなく、第1種と同じく複数の彫字工の存在が指摘される。

第2種漢字活字には、未彫刻活字材、活字の中央を丸く彫って縁を落としたもの、彫りかけ活字、および未使用と思われる漢字活字が存在し、一連の彫字作業を辿ることができる。また、文字の一面一面を上に乗ね上げるような独特の彫り方をした活字の一群があり、第1種漢字活字に比較して、彫字方法に一種のシステム化が認められる。

その他、第2種漢字活字には底面や側面に墨書や朱書を有するものがあり、白粉や朱、紙の繊維の付着が見られるものもある。版面の高さを調整するために底面に貼り付けた薄いへぎ板も残存しており、印刷方法が知られる。

これらの第2種漢字活字は、仏典類の印行に使用されたと考えられる。

⑨数字用活字

本活字も使用書籍が特定できない。直方体で底面は扁平だが、他の活字に比べ高さが低い。最も虫損が激しく、そのため中が空洞化

した活字もある。一字のみ両面彫字活字がある。また、「十二」・「十三」のように二個の活字を接着させたものが5つある。

⑩二字活字

注に使用されたとと思われる「三説」・「三居」など横に二字彫られた活字である。高さは本文用漢字活字第2種と同じだが、横寸法が少し長い。1字の漢字活字を裏面に有する両面彫字活字が二つ含まれる。

⑪近世木活

本文用漢字活字第1種と同じ大きさの、漢字活字第1種と、本文用漢字活字第2種より横の寸法が少し短い漢字活字第2種とがある。第1種・第2種ともに「夏」・「書」の文字があり、書体が酷似することから同時期に製作されたものと思われる。表面に墨付があり、これらの活字を使用して印刷がなされた形跡がある。

⑫不定型活字

本文用漢字活字第2種よりも縦の寸法がやや小さい活字4個と、訓註用片仮名活字より一回り大きい数字活字4個である。数字活字の内、2個の裏面に数字や文字を彫りかけた跡がある。

(5) 慶長勅版の印刷技法との関連性

仁和寺所蔵活字を検討した結果、当該活字は、これまでに確認された他の古活字の形態である、薬研彫りで腰高の立体的な形状を有し、印刷法もキリシタン版の技法に改変を加えた組立式植字法であることが明確になった。慶長勅版に使用された木製活字も、当該活字同様、薬研彫り、腰高活字であろう。手刷りの活版印刷であるという意味では「此の法は朝鮮に出で、甚だ便ならざる無し」という『勸学文』跋文に矛盾しないが、それ以外に朝鮮活字の印刷技法との共通性は認められず、今日までの研究で報告されている慶長勅版の印刷技法に追加して述べることは何もない。

(6) 古活字印刷の持つ象徴文化的意義

古活字印刷は、それが複製技術であるがゆえに、これによって当時としては大量の書籍が印刷されたと想像しうるかもしれないが、それは明治以降の国民国家形成に印刷物が寄与した影響等からの連想であって、近世初頭の文脈の中に古活字印刷を置いたとき、全く異なる姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

本研究の中心的な対象は、門跡寺院の第一である仁和寺所蔵の古活字であったが、慶長年間の仁和寺は双ヶ岡の西方にあって、堂舎も荒廃し、衰微を極めた時期であった。後陽成天皇の一の宮でありながら皇太子を廃され、泣きながら入寺したという良仁親王、覚深法親王を中核に仁和寺の復興を遂げるためには、持てる文化資本を最大限に生かさねばならなかったはずである。心蓮院版『倭玉

篇』の開版は、その手段の一つであったと思われる。これまでの研究において指摘されたように、古活字印刷がキリシタン版と朝鮮版の印刷技法を取り入れたものであり、出版物が中国に発した東アジア共通の文化、漢字・漢文によって印字される時、古活字印刷という複製技術は、象徴的に、南蛮や中国・朝鮮の高度な文化イメージと結びつく。古活字印刷は、当時最も国際的な、高いレベルの文化の象徴であり、よって「権威の文化的象徴」でもあった。テキストが複製されることにも意義はあったが、それよりも古活字印刷という技法で印刷されることに、より一層大きな価値があったのである。そうであれば古活字版を与えることは権威の分配ということになる。しかし大量に分配したのでは権威は分散し、価値を失ってしまう。その意味で、朝鮮の古刻本「龍龕手鑑」の影響下に成立した心蓮院版『倭玉篇』は、極めて限定された条件下に、わずかに印刷されただけであったと私は推測する。この推測は、仁和寺所蔵古活字の調査結果と矛盾しないはずである。

なお、具体的な検証は、8月に刊行予定の村上明子編著『古活字版成立に関する総合的研究—仁和寺所蔵古活字を中心に—』において報告する。この報告書には以下の論考・報告が収録されている。

朝川美幸「仁和寺と古活字製作の可能性について」

杉山淳司・反町始「仁和寺木製活字調査報告」

高妻洋成・大河内隆之・田村朋美「活字資料に付着した顔料の調査」「X線CTによる仁和寺活字の非破壊検査」「赤外線リフレクトグラフィによる墨書の調査」

村上明子「仁和寺所蔵木製活字と心蓮院版『倭玉篇』」「古活字版参考文献目録」「キリシタンの出版活動 参考文献目録」

西野由紀「古活字版雑誌記事目録」

唐 権「中国印刷史研究目録」

金 泰虎「韓国古印刷史研究目録」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

村上明子(2008)「若桑みどり著『クワトロ・ラガツィー—天正遣欧使節と世界帝国—』『インターカルチュラル6』日本国際文化学会年報、第6号、160-162頁、査読有(単著)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

①村上明子編著『古活字版成立に関する総合的研究—仁和寺所蔵古活字を中心に—』2009年8月発行予定、120ページ

②村上明子編『仁和寺所蔵心蓮院版木活字関係資料図版』、2009年3月、50ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 明子(MURAKAMI AKIKO)

関西外国語大学・国際言語学部・教授

研究者番号 70261112

(2) 研究協力者

朝川 美幸(仁和寺財務部管財課 課長補佐)

西野 由紀(龍谷大学非常勤講師)

斎藤 努(京都文学理論研究会)

當麻 良子(龍谷大学非常勤講師)

杉山淳司(京都大学生存圏研究所教授)

反町始(京都大学生存圏研究所技術職員)

高妻洋成(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室室長)

大河内隆之(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室室長)

田村朋美(京都大学大学院)

唐 権(関西外国語大学非常勤講師)

李 偉(国際日本文化研究センター研究部技術補佐員)

金 泰虎(甲南大学国際言語文化センター准教授)

藤本 幸夫(麗澤大学教授)

堀田 圭吾(文化財保存修復部主任)

牛見 正和(天理大学図書館)

大内田貞夫(元親和女子大学図書館長)

森上 修(近畿大学非常勤講師)

松田 博(京都大学人文科学研究所図書館)

小宮山博史(佐藤タイポグラフィ研究所代表・印刷史研究会代表)

田中淳一郎(京都府文化財保護課)

ヘンリー・スミス(京都アメリカ大学コンソーシアム所長)

山中 康行(京都女子大学)

小堀 幸(神戸女子大学管理栄養士養成対策室)

三木 崇臣(古典籍研究会)

水戸 政満(編さん工房 水戸)

真淵 紳一(光楽堂)